

第53回埼玉文芸賞選評

【小説・戯曲部門】

第53回埼玉文芸賞の選考会議は、令和4年2月4日、さいたま文学館の会議室で開かれた。

選考委員は、元時事通信社出版部長で文芸評論家の相澤与剛^{ともつよ}、作家の北原立木^{たちぎ}、作家で文芸評論家の高橋千劔破^{たかはし ちはや}の3名。

候補作は71編。全部に目を通すのは、結構大変だが、駄作も少なからずあり、熟読すべき作品は、そう多くはない。選考会当日。各自、受賞作及び佳作にふさわしいと思う作品をそれぞれが持ち寄った。この段階で作品がバラバラということは、まずない。

13時30分から選考会となった。まず話題となったのが「カラスの居場所」で、題名もユニーク、内容も面白く、受賞作と決まった。タイトルは、同名の喫茶店の名前である。かつてはバーであった。その「カラスの居場所」にまつわる「僕」の若き日の思い出が淡々と語られ、心に沁みる。作者は女性で、男性の視点で書いているが、違和感はない。佳作もそれぞれ趣があり、選考委員の心を捕えた。

(高橋 千劔破)

【文芸評論・エッセイ・伝記部門】

準賞2作品を選ぶことができた。中野利子「半泥子と幼い日の私」は、津市の百五銀行第6代頭取で陶芸家の川喜多半泥子が描きのこした作者幼時の肖像画をめぐって淡々と語り、上品な話に仕上げている。その書き方が委員の好感を呼び、第1席とした。大川哲夫「第十五世住職「良寛」」は、菩提寺の護持会の引き継ぎ書類として偶然手にした分限帳書上控の歴代住職欄に「良寛」の記載を見つけ、コロナ下の行動制限を幸いに追跡調査するが良寛違いで挫折に至る、その経緯を語りつつ既知の良寛像を駆け足でたどった芸ある作品である。

佳作は6作品と多いが、どれかを外すわけにはいかない。第1席は村上トシ子「釈迦堂の桜」。他に順不同で、山崎十生「私の中の寺山修司 自伝的わが俳句出発の記」、鷹志かれん・辻桂子（共著スタイルの個人誌）『変奏曲を編む』、川越幸子「故郷の人たち」、山本久美子「私の渾名は「ボタンさん」」の以上がエッセイ。清水悠希「ヴァイキングたちの料亭政治」は文芸評論での応募

。

(佐藤 健一)

【 児童文学部門 】

応募作品数は36編。今回も埼玉文芸賞、奨励賞ともに該当作なしではあるが、高学年以上対象を中心に意欲作が集まった。

準賞1席、久里明生「学と歩」。中学3年生の学は、修学旅行先で自分そっくりの少年、歩と出会う。彼は離れ離れに育った双子の兄弟だった——。2人の思いや暮らしにリアリティがあり、一気に読ませる筆力を感じた。

準賞2席は、福島のりよ「レバノンの空の下 難民キャンプに生きる」。シリア難民の過酷な現状を物語として描く。難しいテーマに果敢に挑んだ、力のこもった作品。

以下、佳作について。「ギイとテツ、そこにサヨリ」は、ギイのキャラクターが光る。「星の王」は環境問題というテーマ性は強いが、ユーモラスな文章で楽しめる。「袖引小僧」は、埼玉に伝わる妖怪が主人公の愛らしい物語。「飛びはねて空」予知能力を持つ少年の葛藤を描く。「お稲荷様は大忙し」地元の神様をめぐる3部作。「スケープ・ゴースト・タウン」は若い人らしい表現の詩。

(金治 直美)

【 詩部門 】

詩部門の応募数は45点で、単行本7点と原稿作品38点であった。このうち田中眞由美『しろい風の中で』は画布に色彩の言葉を重ねて立体的に描写する作品、宮尾壽里子『海からきた猫』は発想力の豊かさで青の想いで膨らむ家族史の作品、松井ひろか『十六歳、未明の接岸』は繊細な表現が独自性に向い歩行している作品の単行本詩集3冊が最終的な候補となりさらに検討が行われた。各詩集に力量が認められたが審議の結果、第53回埼玉文芸賞は田中眞由美詩集『しろい風の中で』に決定した。体験を表現方法により身近な情景から存在の在り方を綿密に追求している作品が高く評価された。

佳作には前記の宮尾氏、松井氏のほかに、二宮清隆『ゆめ野』、渡部榮太「詩」、渡辺穎子「夏の訣れ」、見沼夜来「五億年後の聖書」の6名とした。なお高校生の応募は1点で奨励賞は該当作なしとした。

(鈴木 東海子)

【 短歌部門 】

高橋元子氏の歌集『帽子が不在』に決定した。定年退職後、夫との暮らしを丁寧^{ていねい}に詠みこんでいる。子供の巣立ったあと、病を持つ夫を支え続けている日常である。

壁にふたつ帽子かけおく夫なりけふはあそびの帽子が不在
花びらを帽子にのせて帰りくる夫の行動範囲は知らず

遊びの帽子が無いということは出かけているのであり、それが元気である証で安堵している。居ないところから夫を推測する発想の柔軟性が各所に見える。身の巡りの出来事にも気を配りつつ、自分自身を見つめていて、安定感のある1冊として纏まっている。

他に佳作として佐藤理江氏の『最初ギリッとふたを開け』、河竹由利氏の「言葉」、岩本実佳氏の「藍、深まる愛」、間野倉子氏の『糸に戯ぶ』、茉莉亜・ショートパス氏の「13月のミニスカート」、玉田一聖氏の「桜石の郷」の6作品に決定した。

(沖 ^{おき} ななも)

【 俳句部門 】

コロナ蔓延により生活習慣が変わってしまった、日々の重圧の1年であった。そのためか応募数は20編少ない67編であった。

今回は磁石に吸い付いてくる針のような作品は見られず、埼玉文芸賞を選ぶことはできなかったが、次のように決定した。

準賞に、佐怒賀由美子氏の『仔猫跳ねて』と石原静世氏の『栗おこは』を選んだ。

佳作には、木下周子「秋祭」、小林邦子『無伴奏チェロ』、平井萌黎「遠き紫」、田中美佐子「葱」、鎌形功「玄」、横田幸子「翼」の6編である。

準賞2名は単行本、佳作は3名单行本等、3名は原稿による応募であった。

句集と原稿の応募作品を比較することの難しさを感じつつ、次回こそ50句応募の作品に期待したい。

そして奨励賞は、佐々木彩乃氏の「消えていく」に決まった。

(尾堤 ^{おづ} 輝義)

【 川柳部門 】

応募作品47点、3委員協議により準賞2名、奨励賞1名を決定した。

準賞1席は山端眞佐子氏の「愛しい日々」。日常生活の1コマを切り取って17音字に作りあげた力量が素晴らしい。（揺り椅子にまどろむ父のいた日向）。準賞2席は相川敦美氏の「女」。視線の位置が千差万別で自己表現に巧みさがあり、自分を良く観察されている。（願い事仏の手からこぼれ落ち）。奨励賞には嶋田優里氏の「成長」を選出した。見たままの写生を突き抜けた言霊の躍動が感じられ観察力（感性）が光る。（あめんぼを人差し指で沈めてく）。

佳作には三代司さゆみ氏の「敵」、鎌倉八郎氏の「蠮螋の斧」、康永京子氏の「生きる」、村田伊代氏の「微笑の日々」、岡田深幸氏の「青春列車」、中本友持氏の「日々これ好日」の6名を選出した。

(四分一 周半)